

工業高校卒業生における継続的な学びの支援の在り方 -卒業生に対する調査結果の報告-

東京学芸大学 島田和典, 東京学芸大学学部生 作田慶

1. はじめに

本研究の目的は、工業高校生卒業生の継続的な学びに対する意識を把握することである。本稿では工業高校卒業生に対して実施した学びの調査結果を報告する。

1.1 継続的な学びの支援の必要性

近年、就職率は大学・高校ともに高止まりの状態であるのに対し、就職した卒業生の早期離職が社会問題となっている。就職後3年以内の離職率は大学卒で31.9%、高校卒では40.9%に上っている¹⁾。そもそも就職(または内定)をゴールと捉えた教育機関の指導、社会的風潮がこの問題の背後に考えられる。また、近年の進学率の上昇、多様な職業・職種を勘案すると、従来から特定の産業分野の人材育成を目指している「専門高校(本研究では工業高校に着眼)卒業」＝「就職」の枠組みとは別の視点での進路指導の必要性が指摘できる。実際に現在の工業高校では、大学進学を視野に入れたコースの設置や、産業創造系といった新しい学科の設置が見られ、幅広い進路が想定される現状であることが認められる。卒業時のゴールを「就職」から「生涯キャリア※」という視点に置き換え、いわば「就職」をスタート地点として社会に送り出し、なおかつ進学者を含め就職者に対しても継続的な学びを支援するための高校・大学・社会の在り方を検討する必要がある。※ここでの生涯キャリアとは、職業を将来にわたり「持続可能」かつ「発展性」のあるものとしていくことを意味する(厚生労働省資料(2007)より)。

1.2 卒業生の振り返りによる「学び」の追求

本研究では、社会で活躍している工業高校卒業生に対し、探索的に社会人としての学びに関する調査を実施することとした。先行研究では、文部科学省の委託事業(イノベーション・デザイン&テクノロジー株式会社)として実施された平成27年度

「社会人の大学等における学び直しの実態把握に関する調査研究」報告書があげられる²⁾。そこには、社会人に対して大学等での必要に応じた新たな学びに関する調査が行われ、社会人への継続的な学びの支援について議論されている。本研究では、この調査内容の一部を援用し、その比較を試みることにした。また、高校時代の学びの有用性、社会人としての学びを率直に自由記述形式で問い、探索的に学びに対する意識の把握を試みることにした。

2. 方法

調査対象者：工業高校を卒業した5年～30年程度の社会人、50名。

実施内容：現在の職業に関する基本的項目(事業規模、業種、職種、役職等)、大学等での学びに対する意欲、高校生として・社会人としての「学び」に対する意識を問う項目。

手続き：調査は平成29年11月～平成30年3月に実施した。工業高校を卒業後5年以上の社会人に対し、調査の内容について同意を得た上で回答を求めた。方法はweb上のアンケートサイトにアクセスし、情報端末上で回答するよう設定した。得られた回答に対し、選択項目等の単純集計を行った後、自由記述の設問に対しては、テキストマイニングによる記述の確認と分類を試みた。

3. 結果と考察

調査の結果、対象者50名すべてにおいて有効な回答が得られた。

3.1 対象者の状況

対象者の概要を表1に示す。表に示す通り、年齢層別では25歳未満、30-35歳未満が多く、この他、男性48名、女性2名、50名全員がフルタイムで働く者であった。また、表の通り、職種は技術系の者、役職については一般社員・

表 1. 対象者の状況

年齢	現在の職種	現在の役職
25歳未満	11	技術系職種 38
25-30歳未満	3	事務系職種 4
30-35歳未満	12	専門職種 2
35-40歳未満	4	営業職・販売・サービス系 3
40-45歳未満	4	企画・管理系職種 2
45-50歳未満	6	その他 1
50歳以上	10	

職員クラスが多い状況であった。このような対象者について、以下の検討を行った。

3.2 大学等での必要に応じた学びへの意欲

質問項目の例及び回答の比較を表 2 に示す。表より、本調査の対象者が 50 名という点を考慮する必要はあるが、「大学等でさらに学びたい」とする回答割合が比較的高く、大学等では「現在の職務を支える広い知見・視野を得ること」等を目的とする意欲を示す回答の割合が高い点に特徴が見られた。

3.3 高校生として・社会人としての学び

①工業高校での学びで現在の仕事に役立っていること、②社会人になった後、自分が成長できたと感じること、③高校生として・社会人としての学びの違いについて、それぞれ自由記述で回答を求めた。得られた回答に対し、①②については、記述内容を確認しながらカテゴリにまとめる作業を行った。その結果、①は「基礎的知識」、「専門的知識」、「プロセス知」の内容に、②については、「直接的な職務遂行能力」、「プロセス知の習得」、「職務内容の指導力」の内容にそれぞれ分類された。③は、高校生として・社会人としての記述をそれぞれ分け、テキストマイニングによりその記述の構造を確認した。その結果、高校生としての学びの記述は受動的といった内容が含まれる一方、社会人としての学びは積極的といった内容が含まれる構造であることが認め

られた。

4. まとめと今後の課題

以上から、本研究の条件下では、卒業後も学びに対して前向きな姿勢を持つ卒業生が多い可能性が認められた。今後は、このような卒業生への継続的な支援の在り方を検討する必要がある。

参考文献

- 1)厚生労働省：新規学卒者の離職状況，2017
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137940.html>
- 2) 先導的・大学改革推進委託事業 社会人の大学等における学び直しの実態把握に関する調査研究報告書，イノベーション・デザイン&テクノロジー株式会社，2015

謝辞

本研究は科研費 17K18660「専門高校卒業生の継続的な学びの支援に関する研究」の助成(代表者：島田和典)を受け、遂行しております。また、日本工業技術教育学会のご支援を受け、会員の先生方にもご協力を頂き調査の実施に至っております。ここに記し、心よりお礼申し上げます。

表 2. 社会人としての学びへの意欲・目的

問	職業に必要な知識や能力を得るため、大学等においてさらに学びたいか	回答数 (N=50)	割合	比較参考 全国調査
	大学等でさらに学びたい	20	40.0%	7.8%
	大学等で学ぶ事に興味はある	8	16.0%	29.8%
	今後大学等でさらに学びたいと思わない	22	44.0%	62.4%

※全国調査(2015)2)の被験者数は2000名

問	大学等でさらに学ぶ場合、何が目的か(複数)	回答数 (N=28)	割合	比較参考 全国調査
	現在の職務に直接必要な基礎的な知識を得ること	11	39.3%	27.3%
	現在の職務における先端的な専門知識を得ること	23	82.1%	21.8%
	現在の職務を支える広い知見・視野を得ること	24	85.7%	23.3%
	現在とは違う職場・仕事に就くための準備をすること	6	21.4%	19.9%

※全国調査(2015)2)の該当者数は752名